

～自作小説～

s0910045

終わりの始まり

デパートの一角に佇む一軒の店。ふつうの人には見えない店。ある一定の条件を満たした者だけが訪れることが出来る店。そして、その者たちは引きつけられる。それが一つの運命なのだから。

「私には見えるんですよ、人の死期ってやつが。1カ月以内に死に行く者がわかってしまう。そういう人にチャンスを与える、それが私のお仕事。お仕事、なんですよ。ここに30個の珠がありますね。その中にはある『能力』が備わっていてこれが面白いものでしてね、自分で能力の種類を決めることが出来るんですよ。楽しいですね、楽しいんですよ。ただし縛り、とでも言うんですかね。漢字一文字。漢字一文字を浮かべながら念じれば、その字がなす能力を珠に刻み『ちから』を得る、と言った具合に。そして、この珠を全て分け与える、死期が間近に迫っている人たちにね……。それが私のお仕事。チャンスって何だ？って言う声が聞こえましたね、ええ聞こえたんですよ。簡単に言えばどんな願い事でも叶えられるチャンス、勿論それなりの代価を支払って頂きますが。」

見るからに怪しい風貌、ぼさぼさで伸ばし放題の髪、胡散臭いサングラス、顎にはちょろっと生えた髭、しかし歳はそこまでいってるようには見えず30代前半といったぐらいだろうか。

「ちからを与えてどうするんだって？そいつは良い質問ですね。戦ってもらうんですよ、『朧（おぼろ）』と。朧というのは、別の世界で猛威を奮っている怪物たちの総称とでも言いましょうか。その世界で2週間生き残ることが出来たのなら願いが叶う。簡単なシステムでしょう。ただ2週間同じような『敵』を倒すだけではつまらないでしょうから、1週間経ったら特別なイベントを催しましょう。参加者が20人以上いるのだからこれは面白くなりますよ……。代価ですか？それなりに、と言いましたが大したものではありません。その人の別の世界で生きている時間を覗かせて頂くだけです。珠を介して覗けるようになっているんですよ。この珠を手に入れた瞬間にもう一つの世界へと誘われるでしょう、傍観者というものは得てして楽しいものなんですよ。おまえは誰なんだって？質問の多いお客様ですね。野暮なことは聞くものではありませんよ。……。そうですね、大抵の人はこう呼びます。『店長』と。」

店長と名乗ったその人間は一息つくとも更に言葉を並べる。

「もうすぐ人が訪れて来るでしょう、次の人はどのようにあちら側で過ごすのか。考えただけでぞくぞくしてきますね。先に、逝った19人は待っているでしょう、自分たちと同じ能力者を。」

『もうすぐ始まる……。もうすぐでキミに逢える……。』

「へえ、ここが新しく出来たデパートか。なかなか綺麗でいいんじゃないの。」

「でしょー？紘が好きそうな店もたくさんあるんだからー。ほらほらー。」

俺の名前は佐々倉紘（ささくらひろ）。このちよいとやかましい女、岸谷柚葉（きしたにゆずは）の幼馴染をやらせて頂いている。夏休みに入り夢の世界にいれる時間が増えると思った矢先のこと。甲高い声は眠ることを許さず、ほっそりとした綺麗なおみ足は肝臓を的確に捉え、唯我独尊女に言われるがままこんな所まで足を運ぶはめになってしまった。まあもう15年以上の付き合いだ、慣れというものは実に怖い。

「おいおい、こんな所でもいちやつくのは止めてくれないか。」

「本当だよ。暑苦しいったらありやしねえ。」

「だから言ってるんだろ？そんなんじゃねえってさ。」

時々イラっとくるぐらいクールぶってやがるメガネ野郎、神守優（かみもりゆう）。小麦色の肌と真っ白い歯が眩しいナイスガイ、結月颯馬（ゆづきそうま）。こいつらも小学校以来の付き合いで、言うなれば、腐れ縁ってやつだ。幼馴染よりこう言った方がかっこいいだろ？

こんな糞暑い日に嫌々来たもの確かに俺好みの店がちらほらある。かと言ってそんな何時間も滞在するような場所では無い訳で。なにになに？ただいまの東京の気温は34・・・度・・・。涼しくなるまでここにしよう、そうしよう。

『・・・けた。』

「ん？なんか言ったか？」

「んーん、何も言ってないよ？どうしたの？」

気のせいだったのか？確かに何か言ってるのが聞こえたんだ。こう脳に直接響く感じに・・・。

『見つけた・・・。』

そうそう、こんな感じに。って・・・。

「おい！今のは確かに聞こえたよな？俺だけじゃないよな？」

「熱にでもやられたのか？勘弁してくれよ、野郎の世話なんかしたくないね。」

こいつに何が起こっても素知らぬ顔で過ごしてやる、絶対にだ。いや、たぶん。

「俺も何も聞こえなかったぞ？こんだけ人がいるんだから、誰かの声が聞こえてくるのも自然なことなんじゃねーの？」

脳に直接声が届くなんて体験今までしたことないんだけどな・・・。どうしたもんだか、嫌な予感しかしねー。

「あんな店今までなかったもんな・・・。ははっ。」

「いらっしやいませ。」

覇気は無いがやけに滑舌の良い声が店の奥から聞こえた。

「私の声が聞こえ、私とこうして目が合っている。この店が見えるのですね？ということは・・・単刀直入に申し上げますと、あなたの命は1カ月ともたないでしょう。」

こいつは何を言っているんだ？俺の命があと1カ月も無いだって？そんな馬鹿な・・・。とか思ってる状況じゃねーんだよな。これはいつもの優の冗談とは違う、間違いなくリアルだ。

「それで俺はどうしたらいい？」

話しかけてきた店の人間の顔が、きよとんとしたものになった。

「ほほう、これは話が早い。いやはやどうして。」

「こういった展開の漫画やゲームを数多くこなしてきた、ただそれだけだ。それに・・・何度も何度も憧れていた世界。」

「いいですねー、実にいいっ！こういうファンシーな方は珍しいですよ！」

「おまえも随分と『ファンシー』だけだな。」

深い闇を携えたサングラスの奥ではどのような眼をしているのだろう、にやついた唇だけが目に入る。

「あなたが心のどこかで望んでいた、別の世界で、2週間生き抜く、たったこれだけのことをして頂きたいだけです。もちろん成功報酬はあります。どのような願い事をも叶えて差し上げましょう。」

「ただ2週間生き抜くだけ、ってな訳じゃないんだろ？」

またこの笑みだ、大抵の場合こういうのがラスボスだったりするんだよな・・・。

「モンスター、とでも言いましょうか。『朧』といったモンスターがそこいらじゅうに徘徊しています。雑魚のようなものもいれば、そうボスのようなものも。ただゲームのようにコンテニューはききません、死んだらそこでゲームオーバー。勿論素手というにはいかないので、『能力』を与えます。」

自分の命があと1カ月も無いことなどもう頭の中には無かった。小さい頃から憧れていた世界、魔物退治、自分だけの特殊能力。そして成功報酬はどんな願いでも叶えられるだって？わくわくしない訳がねーだろ。

「能力？」

「ええ、この珠に念を込めるんですよ。漢字一文字を念じて、その字がなす能力を得る、といった具合です。簡単でしょう？」

珠を受け取り、どんな『ちから』を得ようか考えていると

「この珠に字を刻んだ瞬間に、あちら側に行ってしまう。準備はよろしいでしょうか？」

やけに親切なヤツじゃないか・・・。ゲームをクリアするために一番大事なウェイトを占める部分だろ・・・真剣に考えなければ・・・。

「絃っ！絃ってば！起きてよ！」

「おい、早く起きないと整形手術でも治せないぐらの顔面フェイスになるぞ！」

「柚葉、それ以上やったら本当に七の段出来なくなっちゃうって！この前やっとなら出来ようになったのに！」

やかましい・・・。それになんだこの痛みは・・・。

「あ、起きた・・・。絃っ。ひろー。」

重い、なんだこの重いのは・・・。

「いってえええええ！なんで今殴ったんだよ！」

「なんか知らないけど嫌なことを言われてたような気がして。」

くそう・・・。これから世界を救うっていうのに、これかよ・・・。

「ねえ皆、あんな店あそこにあっただけ？」

ん？なんだって？

「いや、なかったはずだが。」

「1時間前にここで休憩してたけど、あんなの無かったよな。」

こいつらにも見えるようになってる……。どういうことだ……。

「いらっしやい、私の声が聞こえるかい？ 紘君。君がさっさと能力を決めないものだから本来流れるべき未来とは違ったものになってしまったじゃないですか。」

違う！ あいつのあの笑み、これはあいつがそうしたんだ……。やばい、確かあいつはこう言っていた。「私の声が聞こえ、私とこうして目が合っている。この店が見えるのですね？ という事は……。単刀直入に申し上げますと、あなたの命は1カ月ともたないでしょう。」と。

「おい！ こいつらの寿命ももしかして……！」

「察しが良い人は好きですよ、とても。これも貴方が選択に時間をかけすぎたせい……。さあさあお嬢さん方、この珠を持って自分の好きな漢字一文字想像してみてください。時間をかけずに頭にすぐ浮かんだ文字を素直に……。」

「おい、やめろっ！」

「わかってないですね。もう貴方達には他に選択肢は残されていないのですよ？ 紘君、彼女たちの寿命はこのままでいれば残り1カ月も持たないことを忘れないでくださいね。そして成功報酬のことも、ね。」

俺にこいつらを助けることが、支えることが出来る力があるのか……。変わりたい、皆を助けられるぐらいに強く……。『変』わりたい……。っ！

それから急な眩暈に襲われ、直感的に理解した。

長い長い2週間が始まったのだと……。